伊勢湾ごみ流出防衛最前線！

藤前干潟ペットボトル一掃大作戦

12月15日（土）実行 レポート

「新聞見て参加」と
110人参加

45Lごみ袋　可燃ごみ360袋（ペットボトル11,880本）　不燃ごみ96袋

12月15日(土)、藤前干潟ペットボトル一掃大作戦を、新川左岸1.0km付近で官民110名の参加者で実行しました。ペットボトルを中心とした可燃ごみは、45Lごみ袋で360袋、缶・ビン等の不燃ごみは45Lごみ袋で96袋、ライター等の発火性ごみを3袋、合わせて459袋収拾しました。

1時間30分の活動で、ペットボトルやビン・缶で埋め尽くされていた岸辺は、見違えるほどきれいになりました。今回、実行委員会の試算で、伊勢湾に流れ出す前に11，880本（可燃袋360袋×0.6×55本）のペットボトルを拾いました。

この取り組みに、(株)長谷エコーポレーションさんは、大阪・東京・名古屋から23名が参加。名古屋外語大学の留学生3名も参加してくれました。また、PETボトル協議会の浅野事務局長が、東京から実態視察を兼ねて参加していただきました。三重県菰野町や岐阜県恵那市の遠くから参加がありました。愛知県内は、犬山市、豊田市、東海市、岡崎市、瀬戸市、半田市、日進市、東郷町、一宮市、清須市、小牧市、刈谷市、春日井市等、名古屋市内以外の広範囲の地域から多くの方々が、問題意識をもって参加いただきました。

行政からは、西修国交省庄内川河川事務所長、酒向環境省自然保護企画官、工藤彰三国交省政務官の秘書荒木さん、直江愛知県議会議員、吉田名古屋市議会議員も駆けつけて激励して頂き、作業も一緒にして頂きました。三重県環境部局から北川さん、名古屋市環境局から西尾さんに参加いただきました。皆さんありがとうございました。

なお、今回トイレは徳倉建設さんの現場事務所設置トイレをお貸しいただきました。助かりました。ありがとうございました。

次回、第30回記念19春の藤前干潟クリーン大作戦は、5月18日(土)に開催します。また、マイクロプラスチック問題をテーマ（四日市大学の千葉先生の記念講演）にして、1月26日(土)午後1時から、藤前会館で、第8回ごみと水を考える集いを開催します。ご参加いただくようお知らせします。

きれいになった岸辺で全員で記念撮影

ペットボトルの山に挑戦する参加者

←（写真左)(株)長谷エコーポレーションの挽内さん、(写真右)PETボトル協議会浅野事務局長

坂野実行委員長

西庄内川河川事務所長

酒向統括自然保護企画官

荒木工藤国交省政務官秘書

直江愛知県議会議員

吉田名古屋市議会議員

→写真右から浜崎さん、アガスさん、プージャさん

マスコミも注目！！中日、読売が報道

今回の「18藤前干潟ペットボトル一掃大作戦」の取組をマスコミの取材がありました。中日新聞と読売新聞が社会面で報道していただきました。朝日新聞は写真付き2段の記事を報道していただきました。愛知、岐阜、三重三県に配達されるそうです。多くの方々に啓発することができました。なお、今回取材して頂いた中京テレビは、12月20日(木)か21日(金)の夕方の情報番組「キャッチ」の中で特集番組として、今回の一連の取組を報道していただける予定とのことです。楽しみです。

12月16日読売新聞朝刊社会

ペットボトルから藤前干潟を守ろう
ボランティア清掃

藤前干潟に近い庄内川・新川中堤（名古屋市港区）で15日、「藤前干潟ペットボトル一掃大作戦」（藤前干潟クリーン大作戦実行委員会主催）が行われ、ボランティア約110人が岸辺に打ち上げられたペットボトルを手作業で回収した＝写真＝。

国土交通省庄内川河川事務所によると、今秋の台風による高潮で、名古屋港に注ぐ庄内川と新川の水位が上がり、大量のペットボトルが打ち上げられた。同事務所と実行委が約18万本を撤去し、この日も45㌔の袋約460個分のごみが回収されたが、ペットボトルは河口まで約2㌔にわたって残っている。河口には、国際的に重要な湿地としてラムサール条約に登録された藤前干潟があり、環境への悪影響が懸念されるという。

12月16日中日新聞朝刊社会

ペットボトル1万2000本回収
藤前干潟周辺 製造者側も参加

藤前干潟の近くに流れ着いたごみを集める人たち＝15日、名古屋市港区で

名古屋市港区の藤前干潟周辺に大量のペットボトルごみが漂着した問題で、市民ら百十人が十五日、現地を清掃し約一万二千本のペットボトルを回収した。製造会社でつくる業界団体「PETボトル協議会」（東京）も問題を知って初めて参加。浅野正彦事務局長(五七)は「衝撃的な量。リサイクルが進んでいるとはいえ、ポイ捨てを防ぐ啓発が重要と実感した」と話した。

NPO法人や大学でつくる実行委の呼び掛けで、住民や企業の従業員、学生が集まり、干潟へ注ぐ新川の河原を埋めるごみを拾った。十月に続き二度目の活動ながら、ペットボトルや発泡スチロールなどが四十五㌔ごみ袋で三百六十袋、瓶や缶も九十六袋に上った。同市緑区の主婦(四七)は「便利を追求しすぎる世界から変わらないと」と話した。

大量のペットボトルごみは九月、台風の高潮で一帯に流れ着いた。市民有志や河川を管理する国土交通省が撤去した総数は今回を含めて約十九万本。量が多く、まだ一部残っているため国交省が今後も撤去する。

12月13日中日新聞朝刊社会

20年以上前のペットボトル確認
藤前干潟の周辺 長期残留が深刻

名古屋市港区の藤前干潟周辺に大量のペットボトルごみが漂着した問題で、四日市大の千葉賢教授（沿岸海洋環境学）らがごみを分析したところ、二十年以上前に製造されたペットボトルが含まれていた。プラスチックごみの海洋汚染が世界的な課題となる中、いったん流出すると長年残留する実態が明らかになった。（河北彬光）

伊勢湾の海洋ごみを研究する千葉教授が十月、干潟周辺に山積した五百㍉㍑ペットボトルから古そうな百本を収集。ペットボトルメーカーでつくる業界団体「PETボトル協議会」（東京）に分析を依頼した。

メーカー各社が形状から年代を調べた結果、三十八本は二〇〇〇年以前に製造されていた。このうち一九九六、九七年製造分が少なくとも四本あった。五百㍉㍑ペットボトルは九六年に国内製造が始まったことから、初期に捨てられたごみが二十年以上も朽ちずに残留していたことになる。

千葉教授は「ペットボトルはプラごみの中でも丈夫で砕けにくいが、これほど長年残ってしまうとは驚きだ。不法投棄を防ぐ取り組みが重要になる」と話す。

これとは別に無作為に拾った八十本を五年ごとの製造年代別に分類すると、二〇〇六～一〇年製造分が42％と最多を占め、その後は年々減っていた。国内販売分のうち、自治体や業者などが回収した比率は〇六年度は66％だったが、一七年度は92％。調査で分かった傾向は、消費者の意識の変化を反映しているといえそうだ。

大量のペットボトルは九月の台風21、24号の後に見つかった。庄内川や新川から長年にわたり河口の干潟周辺に流れ込み、ヨシ原の隙間にたまっていたが、台風の高潮で浮き上がり、岸に流れ着いたとみられる。

藤前干潟はラムサール条約に登録され、多くの渡り鳥が訪れる。今回の問題を受けて庄内川を管理する国土交通省や市民有志が十月以降、約十八万本を回収した。撤去は完了しておらず、十五日に市民有志が再び清掃する。

12月12日朝日新聞朝刊社会

藤前干潟のごみ 一掃しよう
名古屋で15日 参加者を募集

ペットボトルなどのごみを手作業で回収するボランティア＝10月27日、名古屋市港区

藤前干潟クリーン大作戦実行委員会が、名古屋市港区の庄内川中堤で15日に開く「藤前干潟ペットボトル一掃大作戦・パート2」の参加者を募っている。今年は台風の影響で、干潟近くの庄内川河口に大量のプラスチックごみが打ち上げられた。伊勢湾への流出を防ぐため、実行委と国土交通省庄内川河川事務所がこれまでに18万本程度を回収したが、撤去しきれていないという。

小雨決行。庄内川の明徳橋や新川の日の出橋近くの中堤で午前9時15分から参加を受けつける。問い合わせ先は実行委（090・8421・1037）。